

聖書:使徒の働き14章19~28節

説教:信仰にしっかりととどまるように

はじめに

いつものように今日の所に入るまえに、前回までのあらすじを振り返ります。パウロとバルナバがリステラという町に滞在していた時のことです。生まれつき足の不自由な人が、パウロが語る福音にじっと耳を傾けています。この人に信仰があると見て取ったパウロは、大声でこう言った。「自分の足で、真っ直ぐに立ちなさい。」するといきなり飛び上がって歩き出したので、これを見ていた群衆は驚いてしまう。「パウロは神だ」と言って大騒ぎになってしまいます。そのときパウロは自分の衣引き裂いて、「私はあなたがたと同じ人間です。空し神々から離れて、すべてのものを造られた生けるか見に立ち返りなさい」と叫び、集まった人たちに福音を語り続けました。このようにしてユダヤ人もギリシャ人も大勢救われていきます。ところが、もういっぽうには信じようとしないうダヤ人がいて、嘘偽りもうわざとデマを語ってパウロを中傷し、町にいられなくしていく。そのためほかの町に逃れなければならなくなるのですが、かえって福音が多く地域に伝えられていくきっかけもなっていた。それが前回の話しでした。

今日の所でもパウロはひどい迫害を受け、大変な目に遭っています。それでもパウロはひるまずに福音を語り続けていく。どうしてそこまですのだろうか。パウロが語ったことは、私たちにはどのようなメッセージであるのか。ともに考えてまいります。

## 1 迫害

### 1) 石打ち

19節。「ところが、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにした。彼らはパウロが死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」

みなさんがお持ちの聖書の一番後ろに地図に、第一次伝道旅行の道筋が描かれています。パウロが滞在していたリステラとイコニオンは隣町ですが、アンティオキアはおよそ百キロは離れている。それでもやって来たというのですから、それだけパウロを憎んでいた、いや正確には、それだけキリストを憎んでいたということになります。

ところで、どうして石打ちだったのか。物騒な話しですが、ほかの方法でもよかったはずですが、それ

には彼らなりの聖書の根拠があります。申命記13章に「さあ、ほかの神々に仕えよう」と言う者がいたら、必ずその人を石打ちで殺しなさい、と書いてあったから。旧約聖書は読んでいるけれど、イエスを救い主とは絶対に認めない。その結果、パウロはこんなひどい目に遭わなければならなくなる。

### 2) 立ち上がった

さて、パウロはどうなったか。20節。「しかし、弟子たちがパウロを囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバとともにデルベに向かった。」

いったい何が起きたのかと戸惑うでしょう。興味深いことですが、足が不自由な人に向かって「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言ったときに、同じ「立つ」ということばがここに出て来る。パウロが死んだも同然の状態から立って歩き出したのは、神による奇跡と考えるのがふさわしいと思います。

でもそれだけなら、「神はすばらしい」と言って終わりそうですが、もう少し深掘りしたい。立ち上がったパウロはどんなからだをしていたのでしょうか。奇跡が起きたのだから、からだのどこにも傷がなく、石を投げられる前と変わらなかったのか。そんなはずはない。からだじゅう傷だらけで、もしかしてどこか骨折していたのではないか。今なら救急車で病院に担ぎ込まれるくらいの瀕死の重傷です。ところが一晩寝て休んだら、隣の町テルベに移動して福音を宣べ伝えたというのです。隣と言っても歩いて数日かかる距離です。「一度決めたら二度とは変えぬ」、そんな演歌のセリフを思い出します。しかし、わきで見ていたバルナバは、さすがに心配して、こう提案した。「まず傷を治すことが優先だ。ここで引き返そう。」それで引き返すことになったのでしょうか。では、どのコースで戻るかです。二つ考えられた。今滞在しているテルベからそのまままっすぐ東に向かっていくのか、反対に西に向かってもと来た道を引き返すか。距離的にはそのまま東に進んでいった方が近し、パウロの故郷タルソも目の前です。ところがパウロは遠回りになるのをいとわずに、もと来た道を引き返します。距離的に不利なばかりではない。もと来た道には、パウロを迫害したユダヤ人たち

が待ち受けています。それがわかっているのに、なぜ引き返したのでしょうか。

## 2 教会

### 1) イエスが建ててくださる教会

パウロとバルナバが福音を語ったら多くのユダヤ人と異邦人が信じて救われました。でも、救われたらそれでおしまい、ではない。救われた者は、教会につながらなければなりません。それはイエスが約束してくださったことだからです。マタイ16章18節。「そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」

ところが、さあこれから教会を建てようというとき、迫害が起きてパウロたちはほかの町に行かなければならなくなった。言ってみれば、途中で放り出したかたちになっていた。パウロはそのことが気がかりで、怪我をしていたのにも関わらず引き返そうと考えた。

22, 23節を読みます。「弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ」と語った。また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。」

パウロは町に着くと、弟子たちの心を強め、信仰がゆらいでいる人たちには、しっかりとどまるように勧めたとあります。なぜ信仰がゆらいでいたのか。二つ理由があります。クリスチャンと呼ばれる人たちは周りにいません。みな生まれたばかりでなにもわからないまま、放り出されてしまった。まさに羊飼いのいない羊の群れのような状態に置かれたままになっていた。羊はしっかりとした羊飼いがいて初めて安心して生活できる。羊飼いがいなかったのも、信仰が揺らいでいた。これが一つ目の理由です。

それでパウロは、教会の核になる長老を選んで霊的な指導と教会の運営にあたらせます。とは言え、時間的な余裕はありません。じっくりと神学校で訓練受けさせるというわけにはいかない。本当は、一つの町にじっくりと腰を据えて後継者を育てたかったけれど、いまはそれがかなわない。後のことについては、教会を建ててくださる主にゆだねることにしました。

### 2) 苦しみを経て神の国に入る

彼らの信仰が揺らいでいた二つ目の理由。パウロとバルナバは、イエス・キリストの福音を語ったことにより、根も葉もないうわさを流されたり、意地悪をされ、町にいられないようにされました。そうしたら誰でも考えます。自分たちもパウロと同じように嫌がらせを受け、もしかして職を失うかもしれないかと、そんな不安を覚えていた。そこへ追い打ちをかけるように、パウロが石打ちされて殺されそうになったという衝撃的なニュースが飛び込んできました。これを聞いたら、今度は自分かもと考えて信仰が揺らぎます。それでパウロは、信仰にしっかりとどまるようにと励まします。どんな言葉で励ましたか。「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ。」

苦しみがなくなります、ではなくて、苦しみを経なければならぬ、と言った。これを聞いた人たちは、どう受けとめたのでしょうか。「そんな話は聞いていない。最初にそういう話を聞いていたら、絶対信じなかった。」そんなクレームがあってもおかしくない。

もしパウロが健康で、何があっても安全が守られているという立場で語ったらどうだったか。おそらくパウロの言葉は、受け入れられなかったでしょう。かえって反感を買っていたかもしれない。ところが、いまパウロはどんなからだで語っているか。石打ちにされて骨が折れ、傷がまだ癒えていない、頭には包帯が巻かれ、足を引きずり、手も不自由だったかもしれない。いままさにパウロは苦しみに遭っているのです。そして、これから先も苦しみが待っている。パウロはいつ殺されるのではないか。そんなふうに関心されて苦しみの真っ最中にある人が語っている。人々はパウロが語ることばを、神のことばとして受けとめます。

## 3 パウロの原点

### 1) キリストを迫害した自覚

それにしても、こんな危険な目に遭いながら、なぜパウロは福音を語り続けるのか。パウロがどのようにして救われたのか、そこに原点にあります。ダマスコに向かう途上、強い光を受けて地面に倒れたとき、彼は、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞きます。神を愛すると言いながら、その神ご自身を迫害して苦しめた。自分もイエス・キリストを十字架に追いやって殺した者の一人であるという強烈な罪の意識がこころに刺さっているのです。だから今、福音のために自分が迫害を受けたとしても文句は言えない。いやそのような消極的なことではない。

## 2) 罪を赦してくださる方を伝える

もっと積極的な理由があります。キリストはどうされたのです。人々がイエスを迫害し、十字架に追いやろうとしたとき、主はどのようなお姿になられたか。イザヤ書53章7節にこう書いてある。「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

このような姿となって十字架におつきなり、神の国に到る道を備えて下さったのであれば、私たちもキリストに倣って、苦しみを味わうことがある。もちろん、自ら進んで苦しむのではない。黙っていても苦しみは向こうからやって来ます。そういうとき、世の人たちは、「運が悪い」とか「不幸だ」とか「呪われている」と言うだろう。しかし、私たちはそう考えない。この苦しみの先に神の国が備えられている。苦しみに遭えば、いつきは悲しい思いになるでしょう。けれども、この先に神の国が備えられているのだと喜ぶことができる。これがイエス・キリストが下さった恵みであると私たちは信じます。